

An Annotated Japanese Translation of Chapter 3 of the Śaṅkaradigvijaya

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀田, 和義 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2043

シャンカラの世界征服¹

—Śaṅkaradigvijaya 第3章訳注—

堀 田 和 義

第3章

- 3・1 このようにシヴァ²が少年期に達すると、神々³の最上者たちは、地上で6つの学問⁴に通じた善き人々の家に生まれた。
- 3・2 ヴィシュヌ⁵は、技芸の宝庫であるヴィマラという名のバラモン⁶から生まれた。地上において、人々は彼をパドマパダ⁷と呼び、彼によって対論者たちの名誉は傷付けられた。
- 3・3 ヴァーユ⁸も、供犠によって名声という光輪を広げた⁹プラバーカラから生まれた。彼は二元論者¹⁰を沈黙させ¹¹、周知のように¹²、ハスターマラカ¹³という名前であった。
- 3・4 ヴァーユ¹⁴の10〔番目〕の部分からは、トータカ¹⁵という名の者が生まれた。彼の名声という海を渡っている大地は輝きを放つが、対論者の言葉という小舟は彼によって揺さぶられた。
- 3・5 シラーダ¹⁶の息子〔であるナンディーシュヴァラ¹⁷〕も生まれた。傲慢な論者たちを打ち負かすことにより名声を高めた彼を、地上ではウダンカと呼んだ¹⁸。
- 3・6 ブラフマン¹⁹はスレーシュヴァラ²⁰、ブリハスパティ²¹はアーナンダギリとして生まれた。アルナ²²はサナンダナ²³として、ヴァルナはチトスカという名の者として生まれた。
- 3・7 自他ともに嫉妬してばかりのダイティヤ²⁴たちを憎む²⁵その他の神々²⁶も、世の人々の庇護所である、主シャンカラの御足に奉仕するために、牡牛のようなバラモン²⁷の息子として生まれた。
- 3・8 唯物論者の学説を創始したことに怒りを覚えたブラフマン²⁸の呪いにより、ブリハスパティ²⁹はマンダナという名の者として地上に生まれ、ナンディーシュヴァラは、シヴァ³⁰の憐れみに促されてアーナンダギリという名の者として生まれたと、

ある者たちは言う。

- 3・9 そして、降臨したブラフマンのかの〔有名な〕妻も生まれた。彼女の名前はウバヤバーラティーとしてよく知られた。〔しかし、〕事実上、彼女はサラスヴァティーであるため、世の人々も彼女をサラスヴァティーと呼んだ。
- 3・10 昔々のこと、ブラフマン³¹のもとで、一切知者に匹敵する聖者たちが各自のヴェーダを学習していたという。その時、非常に怒りっぽいドゥルヴァーサス³²がヴェーダを唱えていて、ある音に関して間違いを犯した。
- 3・11 その時、月のような顔をしたサラスヴァティーが笑った。すると、恐ろしい教えを説く聖者ドゥルヴァーサスは、音素から生じた言葉の連なりを身体とする彼女に怒りを覚え、火のような目で見た。
- 3・12 ドゥルヴァーサスが「無礼な女め、地上で人間に生まれろ」と言って、サラスヴァティーを呪うと、彼女は恐怖を覚えた。そこで、怯えてドゥルヴァーサスの足下にひれ伏し、生まれつき怒りっぽい彼に許しを請うた。
- 3・13 聖者たちはサラスヴァティーが怯えているのを目にすると、恭しくドゥルヴァーサスを宥めた。「聖者よ、あたかも父親が罪を犯した息子を許すように、過ちを犯した彼女を許してあげて下さい、尊い方よ。」
- 3・14 すると、サラスヴァティー³³と聖者の王たちに³⁴宥められて満足したドゥルヴァーサスは、「人間の姿をとったシヴァ³⁵に出会えば、神に戻るだろう」と言って、呪いを解いた。
- 3・15 サラスヴァティーは、あらゆることを知り、あらゆる美質を備えた、バラモンの娘として、ショーナ川の岸に生まれた。彼女には生まれながらに知識³⁶が備わっていた。頭の中にあるもの³⁷を取り除くことが、誰にできるだろうか。

- 3・16 少女は、あらゆる学問体系³⁸、6つの補助学³⁹とヴェーダ、美文詩をはじめとするもの⁴⁰や、その他のあらゆるものを知っており、この世に知らないことはなかった。それゆえに、彼女は人々の驚きの対象となった。
- 3・17 美質を知る彼女は、牡牛のようなバラモンたちから、美質を備えた魅力的なヴィシュヴァールーパ⁴¹のことを聞き、そのヴィシュヴァールーパも彼女のことを聞いた。そのため、両者の間に会いたいという願いが生じた。
- 3・18 両者はお互いに会いたいと願い、思いが強くなったため、眠りについて〔夢の中で〕相見えて語り合い、目覚めると、再び別離の火に身を焼かれた。
- 3・19 両者は、会いたいと願っていても会うことができず、お互いの噂に心を奪われ、適切な食事や振る舞いができなくなった。そして、心に思うことで、身体がやせ細ってしまった。
- 3・20 ある時、両者の身体がやせ細っているのを目にして、彼らの両親が尋ねた。〔ヴィシュヴァールーパの両親が言った。〕「お前の身体はやせ細り、心にも誇りが無いが、病気も他の原因も見当たらない。
- 3・21 望みのものを失ったり、望まないものと結び付いたりすることにより、人間⁴²には苦しみが生じる。その両方を考慮しても思い当たらないが、周知のように、原因なくして結果が生じることはない。
- 3・22 お前の結婚適齢期は過ぎていない。他人から軽蔑されたのでもなければ、財産がないわけでもない。耐えがたい、家族というこの重荷は、私にのしかかっている。この世において、少年であるお前にいかなる苦悩があるだろうか。
- 3・23 お前には、苦しみの原因となる愚かさも、他者に打ち負かされることもない。というのも、論理に精通した者たちにとって非常に理解しがたい内容のものでも、賢者たちの間で率先して明瞭に講じるからである。
- 3・24 生まれてこの方、お前は〔ヴェーダに〕規定された祭式を執行しており、夢の中でさえも、規定されたとは異なる祭式を執行したことがない。それゆえに、地獄の責め苦を恐れる必要もない。

お前の顔は、どうして毎日、輝きを失っているのだ。」

- 3・25 根気よく、幾日も話すように言われた2人は、大きな憐れみを備えた両親に、次のように答えた。〔ヴィシュヴァールーパは答えた。〕「あなたの根気のよさゆえに、心の中にあることをお話ししましょう。言うべきことを言わないのは、私に恥じらいをもたらすからです⁴³。
- 3・26 ショーナという名の川の岸に住んでいるバラモンに、一切知者性の拠り所で、無上の美貌と衣を備えた娘がいることを、牡牛のようなバラモンたちから聞きました。尊い方よ、私の心は、彼女との結婚を求めています。」
- 3・27 息子が非常に恭しく言うと、父親は嫁選びに精通した2人のバラモンを派遣した。彼ら2人は、自らの仕事をなし遂げるために、ヴィシュヌミトラ⁴⁴に会うことを求めて多くの国々を経て、彼の家にたどり着いた。
- 3・28 〔サラスヴァティーは答えた。〕「王宮に住み、あらゆる論書を学び、尊敬すべきヴィシュヴァールーパという名で地上に知れ渡った者がいます。その方の蓮のような足の塵を、私は絶えず希求します。お父さん、もしあなたがこれを手伝ってくれるならば〔その願いは実りあるものとなるでしょう⁴⁵〕。」
- 3・29 父親が娘の言葉を耳の穴で飲んだ時、息子の優れた婚礼のために、バラモンたちの師である尊敬すべきヴィシュヴァールーパの父親に派遣されて、美しい衣を身にまとい、美しい色の杖を携えた2人〔のバラモン〕がやって来た。
- 3・30 規定された行いによってその2人の優れたバラモンに敬意を表すると、サラスヴァティーの父親は、訪れた理由をゆっくりと尋ねた。彼ら2人は「私たち2人は、尊敬すべきヴィシュヴァールーパの父親の命令により、〔あなたの〕娘の婚礼のためにやって来ました」と答えた。
- 3・31 「彼は、自分の息子と学識、年齢、家柄、行い、法の等しい女性のことを耳にして、私たちを派遣しました。バラモンよ、彼のために⁴⁶私たちはあなたの娘を乞います。この一對の宝石がお互いに結び付きますように。」
- 3・32 〔サラスヴァティーの父親は答えた。〕「バラモンよ、彼の言ったことは私にとって確かに好ま

- しいのですが、私の妻に尋ねてからにします。〔というの、〕嫁にやるというこのことは、いつでも妻次第だからです。そうでないと、〔娘が〕苦しむことになり、妻を苦しめてしまいます。」
- 3・33 そこで、彼は妻に尋ねた。「親愛なる女よ、お前には息子のような少女がいるが、その娘を嫁にもらうために、王宮から2人のバラモンが〔来ています〕。私たちはどうするのか、正しく考えて、ひとつだけ答えなさい。答え直してはいけません⁴⁷。」
- 3・34 「妻は答えた。」「遠くにいますし、学識、年齢、家柄、行いの類いも分からないのですから、あなたに何を答えたら良いのでしょうか。天啓聖典においても、世間においても、財産があり、家柄、行いを備えた者に娘を与えるべきであると知られています。」
- 3・35 「夫は言った。」「罪のない女よ、お前はこのことをそのように限定することはできません⁴⁸。〔というの、〕周知のように、クンディナの主であるかのビーシュマカ王は、聖地〔巡礼〕を装ってさまよっていた、クシャスタリーの主であるクリシュナ⁴⁹に、吟味しないままで、かのルクマニーを与えた〔からです〕⁵⁰。」
- 3・36 高潔な女よ、この者が誰に相応しいかなどと考えてはいけません。仏教徒⁵¹の中でも征服しがたい者たちに打ち勝つことにより、打ち負かされることのないヴェーダの道を努めて確立したかのクマーリラ⁵²が、彼を弟子として教えたのです。
- 3・37 齒の美しい女よ、我々の婿になる者を十分に言い表すことができるでしょうか。〔というの、〕最高のバラモンにとっては、外的な財産ではなく、学識こそが財産〔だから〕です。それは限りなく地平線の果てまで続いており、王、盗賊、遊女でも奪うことができません。
- 3・38 妻よ、その財産というものは、獲得、保全、消失の中にあり、絶えず心を悩ませます。財産に関しては、盗賊、王、親族に対する恐れがあります。〔ですから、〕愚者には、安寧という属性が決してありません。
- 3・39 ある者たちは、貪欲に支配されて財産を地中に隠し、享受しません。しかし、ある者たちは〔享受したい時に、隠した財産を⁵³〕見つけること
- ができません。ある者が隠した物を別の人々が奪い、川の近くにあれば、水がそれを奪います。
- 3・40 娘を完全に家に留めてはいけません。娘が結婚よりも前に初潮を迎えるのを目の当たりにしたら、自分の両親を苦しく、恐ろしい地獄に落とすと、法典が述べています⁵⁴。
- 3・41 娘に関するこのような諍いを私とするべきではありません。娘に尋ねましょう。自分の夫になる人を、彼女が話すでしょう。」このような取り決めをすると、両親はそこから娘のもとへ行って、望んでいることを話した。
- 3・42 「尊敬すべきヴィシュヴァルーパーの父親が、娘を乞う2人のバラモンを派遣しました。身体の美しい女よ、私たちが何をすべきか言いなさい。」すると、彼女の身体には数々の喜びは現れなかったが、体毛が逆立つという形で外に現れた。
- 3・43 彼女は、体毛が逆立つことによって両親に答えた。両親もそれをもって、2人のバラモン⁵⁵に承諾を与えた。その2人の優れたバラモンは、別のバラモンを連れて、娘の両親の家から自分たちの家に向けて出発した。
- 3・44 数学などにも巧みな口を持つかのサラスヴァティーは、「今日から14日後の〔半月の〕10日目に、ヤーミトラ星宿などの吉祥な組み合わせを備えた瞬間があります」とこのように書いて、伝言者に示した。
- 3・45 望んでいることをなし遂げて、心から喜び、満足した2人のバラモンは、尊敬すべきヴィシュヴァルーパーの至上の父親に会った。すると、その威厳が知れ渡った彼は、2人の顔を見るや否や「望みが叶った」と確信した。
- 3・46 別のバラモンは⁵⁶、自分の手に持った手紙を差し出した。ヴィシュヴァルーパーの父親は、手紙を見ると微笑み、幸福の海に沈み込んだ。そして、彼はやって来たそれらのバラモンたちに敬礼した後、高価な衣などを与えて適切に敬った。
- 3・47 学識あるバラモン⁵⁷から話を聞いた父親に知らされて、かのヴィシュヴァルーパーは喜んだ。そして、親族に愛されるヴィシュヴァルーパーは、結婚に適したことを実行するために、集まった親族たちにそれぞれなすべきことを告げた。
- 3・48 占星術に通じており、多くを知る、大勢の

望ましいバラモンたちがやって来て、吉祥な時を示した。すると、完全な身体を備えたヴィシュヴァールーパは、吉祥な物を携え、あらゆる装飾品を身につけて、広いショーナ川の岸边にやって来た。

3・49 かのヴィシュヌミトラ（サラスヴァティーの父親）は、婿がショーナ川の岸边にやってきたのを様々な人から聞いた。そこで、迎えに行き、愛しい者に会って、喜んだ。そして、多くの楽器の音とともに彼を家に迎え入れた。

3・50 坐具を勧め、優しい言葉をかけた後、洗足水、および高価な器に入れた歓待の水と蜂蜜の混合物を彼に差し出した。そして、「私も、この娘も、これらの家、牛、黄金もすべてあなたの物です」と言った。

3・51 「今日、私たちの家は浄められ、私たちは敬われました。結婚の名の下にお目にかかることができました。もしそうでなければ、博学な者の筆頭であるあなたと私の間には大きな違いがあります。〔それでも〕善業が熟することにより、人は幸福に近づくものです。

3・52 尊い方よ、何であれ、この家であなたの気に入るものは、すべてあなたの物であることをお伝えします。」「すると、ヴィシュヴァールーパの父親が答えた。」「すべてはあなたの物ですが、欲しい物がある時は、言うことにします。実に、〔あなたの言葉は⁵⁸、〕常に年長者たちを敬っている者に相応しいものです。」

3・53 非常に優しい言葉を備えた2人は、お互いにこのように言うと、この上ない喜びを得た。他の両家の召使いたち⁵⁹も、好ましく、正しい会話により、また自分の欲求にもとづく振る舞いや冗談により、大きな喜びを得た。

3・54 生まれながらに美貌を備え、美しい衣をまとった少女と婿を目にすると、両家の者たちも〔見とれてしまい、〕何もできなくなりました。しかし、「やらなければいけない」と考えて、遅れながらも身を飾り、この吉祥な日の特別な飾り付けを行った。

3・55 装身具の類いもあり着けなかった。というのも、2人の輝きによってその光輝が打ち負かされてしまうからである⁶⁰。両家の者たちは、世間の常識に従い、「やらなければいけない」と考

えて装身具を着けただけであり、「〔2人を〕際立たせよう」という考えによるものではなかった。

3・56 占星術師たちは博学であったけれども、女友達と遊んでいる、完全な知性を備えたサラスヴァティーに、吉祥な時を尋ねた。その後で、占星術師たちは、自分たちの考えに従って、彼女が述べた吉祥な組み合わせを備えた吉祥な時分の瞬間を捉えた。

3・57 神聖な時に、太鼓、小太鼓、軍鼓、ヴェーダ学習、法螺貝の音によって諸方位が覆い尽くされると、ヴィシュヴァールーパ⁶¹は、新芽のような手によって、サラスヴァティー⁶²の蓮のような手を握った。

3・58 どんな物であれ、人が求める物を与え、〔両親は〕人々から称賛されて、満足した。そして、あたかも如意樹のように、非常に高潔で、装飾された2人は、望みの物を手に入れて、集会場を歩いた。

3・59 その後、かのヴィシュヴァールーパは、グリヒヤ・〔ストラ〕に述べられた方法に従って祭火を設置し、そこに正しく献供した。一方、妻は炒った穀物を献供し、〔その〕煙を嗅いだ。それから、ヴィシュヴァールーパも、祭火に対して右邊を行った。

3・60 〔ヴィシュヴァールーパは、〕献供の終わりにバラモンの最上者たちを満足させ、やって来たすべての親族たちを送り出した。そして、サラスヴァティーとともに、灌頂を受け、祭火を守り、喜びのうちに、祭火小屋で4日間を過ごした。

3・61 愛しい婿のヴィシュヴァールーパが発案する時、花嫁の両親が近付いて来て言った。「注意深く聞いて下さい。幼児と同様、娘は何も知りません。

3・62 この娘は鞠などで子供たちと遊び、お腹が空くと苦しくなって家に帰って来ます。一人娘なので、娘には家の仕事を言いつけませんでした。〔ですから、〕自分の娘のように守ってあげて下さい。

3・63 あなた、この娘には優しい言葉で命令してあげて下さい。厳しい言葉で命令してはいけません。〔というのも、それにより〕怒ってしまうと、やらなくなってしまうからです。ある者たちは優しい言葉に従いますが、ある者たちはその逆です。なぜならば、人は本性を捨てることができないか

らです。

3・64 ある時、非の打ちどころのない心を備えた、とあるバラモンが彼女のもとへやって来て、その相を見ると、次のように言いました。「[この娘は、] 生まれが人間であるだけで、本性は神です。ですから、あなた方は、彼女に対して厳しい言葉を用いてはなりません。

3・65 [彼女には] 一切知者性の相が完全な形で備わっています。非の打ちどころのない彼女は、いつの日か、2人の論者の討論において、彼らの証人になるでしょう。」我々にこのように述べると、そのバラモンは立ち去りました。

3・66 嫁の義母に[私たちの次の] 言葉を伝えて下さい。なぜならば、嫁の保護は、彼女にかかっているからです⁶³。「この美しい娘は、あなたの委託物のようなものです。[ですから、] 家の用事は、非常にゆっくりと彼女に[やらせて下さい]。

3・67 子供の時期には、子供ゆえの過失がありがちですが、義母はそれに目を留めないで下さい。というのも、私たちはみな、知恵を付けた後で、ゆっくりと立派になったからです。」

3・68 私の心は、[婿の母親に] 会って話すことができません。なぜならば、家を守るのに、他の者がいないからです。会って話すのと同じ結果が私たちに生じるように、親愛なる人たちは、婿の母親に伝えて下さい。」

3・69 [母親はサラスヴァティーに言った。]「愛児よ、今日、あなたは、新しい段階に達しました。美しい眉をした娘よ、それを守るために、いつでも賢くありなさい。人々の嘲笑の的となるような、子供の振る舞いをしてはなりません。[というのも、] あなたのそのような振る舞いは、私たちとは違って、他の者を満足させないからです。

3・70 結婚の前は娘の両親が主人と呼ばれ、その後は夫が[主人と呼ばれます。それゆえに、] その夫を、絶えず、唯一の庇護所としなさい。そうすれば、得難い2つの世界が手に入るでしょう。

3・71 美しい娘よ、主人が食事を終えていないならば、食事をしてはいけません。[主人が] 旅に出ているならば、着飾ってはいけません。沐浴などに関しても、前後をはじめとする決まりがあります。[これらに関しては、] 年長の女性たちの行い

こそが、最高の判断基準です。

3・72 主人が怒っている時は、ひと言でも、怒りに駆られて口を利いてはいけません。すべてに耐えなければいけません。そうすれば、[自然と] 彼は落ち着きます。愛児よ、彼が顔をほころばせている時は、輝いているかのようにでありなさい。罪のない娘よ、望まれたことはすべて、忍耐によってのみ成就するものです。

3・73 幸いな娘よ、夫の目の前でであっても、決して他の男の顔を見て話をしてはいけません。ひと気のない所でその男と話すのはもってのほかです。以上が、あなたに対する教えです。というのも、夫婦の間に生じた疑いは、愛情を減ぼしてしまうからです。

3・74 一方、娘よ、夫が帰って来たら、仕事をやめて立ち上がり、望みどおりに、速やかに水で両足を洗いなさい。おお、貞淑な娘よ、この世では、人生や幸福をほんの僅かであってもなおざりにしてはいけません。

3・75 ある時、夫が不在でも、彼の縁者や偉大な者たちが家にやって来たならば、大きな敬意をもって、彼らを敬うべきです。さもないと、彼らが失望して、一族を焼いてしまうでしょう。

3・76 両親と同様、義理の両親にも従いなさい。同様に、鹿のような眼をした娘よ、自分の兄弟と夫の兄弟にも[従いなさい]。というのも、彼らが怒ると、たとえ愛情があっても、お互いの繋がりを断ってしまうからです。このように、私は心の中で推しはかります。」

3・77 有益な教えに心を留めた花嫁と花婿は、師や親族たちによって敬意を表されて、王宮にやって来た。[その時から、花嫁は] ウバヤバーラティーという名前になった。

3・78 喜んだその[ウバヤ] バーラティーは、再び満足したドゥルヴァーサス⁶⁴によって以前に与えられた呪いの期限として、[シャンカラの] 一切知者性を完成するために、集會場で証人となるだろう。

3・79 [ウバヤ] バーラティーをその一切知者性の証人とするシャンカラも、自分の[幻] 力により、子供のように見えており、あたかも気高いヴィシュヌ⁶⁵のように、自分の子供らしさに相応しい

物を求めた。

- 3・80 移り気な子供の時期にあっても、〔シャンカラは、〕あたかもヴィシュヌ⁶⁶がイチジクの本の葉の上でしたように、世界の未来、過去のものすべてを自己の中に見ていた。
- 3・81 戯れに新しいブランコに登り、可愛らしく戯れる、その驚くべき子供を、人々はいつでも、あたかもヴァースデーヴァを見るかのように、瞬きしない目で見た。
- 3・82 ヴィシュヌ⁶⁷、シヴァ⁶⁸、ブラフマン⁶⁹に等しいシャンカラの、柔らかく、新しい雲の連なりのように黒い、豊かな髪の間により、〔彼は〕いつでも、非常に正しく装飾されていた。
- 3・83 周知のように、仏教徒、パーシュパタ、ジャイナ教徒、カーパーリカ、ヴィシュヌ派、その他すべての、邪悪で、悪しき学説を唱える者たちによって、ヴェーダの道は断たれていた。恐ろしい輪廻の森をさまよう者たちに幸福をもたらすシャンカラは、その道を守るために地上にやって来て、戯れていた。

尊敬すべきマーダヴァの『シャンカラの勝利』集成それぞれの神の降臨を内容とする第3章終わり。

(本研究はJSPS科研費19K12953の助成を受けたものです)

注

- 1 本稿は、堀田2018, 2020の続編である。『シャンカラの世界征服 (*Śaṅkaradigvijaya*, 以下, *ŚDV*)』の概要や底本、参照した翻訳などに関する情報は、堀田2018の序文、および堀田2020の注1を参照。
- 2 若い、鹿を印とするもの(=三日月)を頭に戴く者 (*bālamṛgāṅkaśekhara*)
- 3 天界に住む者たち (*diviśad*)
- 4 この6つの学問 (*ṣaṭśāstra*) の中身については、注釈などにも説明がないため不明。
- 5 カマラー (=ラクシュミー) の拠る所 (*kamalānilaya*)
- 6 地上の神 (*bhūśura*)
- 7 パドマパダよりも、パドマパーダ (*Padmapāda*) の方が、一般的であると考えられる。前田1980, p.39以下, Potter 1981, p.563以下を参照。Upādhyāya 1967, Dvivedī 2012も、サンスクリット語テキストは *Padmapada* とするが、ヒンディー語訳では *Padmapāda* という表記を採用している。
- 8 浄める者 (*pavana*)
- 9 被限定要素である人名のプラバーカラが「太陽」を意味することにもとづく比喩的な表現。Dvivedī 2012は、*savanonmilitakīrtimaṇḍalāt* をヴァーユがプラバーカラの息子として生まれた目的と解し、*maṇḍala* という語に関しても、光輪ではなく集まり (*saṁūha*) と解している。
- 10 別異論者 (*bhedavādin*)
- 11 直訳は、「喉を手で掴んだ (*galahastita*)」。
- 12 *Advaitarājyalakṣmī* (以下, ARL) は、*kila* という語に関して「力士が対戦相手の首に手をやることが周知であるように」といった解釈を示す。galeti/ gale hasto mallayuddhe pratimallasya dīyāta iti prasiddham eva sa iva tiraskṛtatvena saṁjāto yeśāṁ tādrśā bhedavādinō yena sa tatheti yāvat/ ARL on *ŚDV* 3.3.
- 13 ハスターマラカについては、前田1980, p.40, Potter 1981, p.601以下を参照。
- 14 浄めている者 (*pavamāna*)
- 15 前田1980, p.39以下, Potter 1981, p.598以下を参照。
- 16 Upādhyāya 1967は、サンスクリット語テキストでは *Śilāda*, ヒンディー語訳では *Śilādi* とし、Dvivedī 2012は、サンスクリット語テキスト、ヒンディー語訳ともに *Śilādi* とする。
- 17 *Ḍiṇḍima* に従って補った。śilādasya sūnūṇa putreṇa nandisaṁjñākena/ *Ḍiṇḍima* on *ŚDV* 3.5.
- 18 ARLは、この詩節を3.4に続いてトータカの出生について述べたものと解するが、従わなかった。nanu toṭakācāryasyaiva kuto na janmasthānam padmapādādivad uktam ity āha/ udabhāvīti/ ARL on *ŚDV* 3.5. また、ARLは、*udaṅka* を *udarke* (結果として) と読み、「〔論者たちを打ち負かした〕結果として、地上では、彼を名声を高めた者と呼んだ」と解しているようである。
- 19 創造主 (*vidhi*)
- 20 別名はマンダナとされる。vidhir brahmā sureśvaro maṇḍanāparasamjñā āsa babhūva/ *Ḍiṇḍima* on *ŚDV* 3.6. 他にも、ブラフマンがマンダナとして生まれたことは、*ŚDV* 1.56でも述べられている、該当箇所和訳に関しては、堀田2018, p.34を参照。
- 21 言葉の宝庫 (*girāṁ nidhi*)
- 22 ガルダの兄弟、もしくは太陽のこととされる。aruṇo garuḍabhrātā sūryo vā/ *Ḍiṇḍima* on *ŚDV* 3.6.
- 23 第6章では、このサナンダナがヴィシュヌの化身のパドマパーダとして述べられているが、これは矛盾ではなく、1つの身体に2つの神が降臨することは可能であるという。yady api viṣṇuḥ padmapādasamjñō babhūvety uktam sa eva ca vakṣyamānarītyā sanandanas tathāpi pakṣāntaram āśrityaikatra vobhayāṁśāvatarāṇam āśrityāvirodhaḥ sampādanīyaḥ/ *Ḍiṇḍima* on *ŚDV* 3.6; nanv ayam sanandana eva ṣaṣṭhasarge padmapādatvena garuḍabhrātaruṇāvātāratvena vā varnyata iti sphuṭa eva

- virodha iti cen na/ cārvāketyādivakṣyamāṇāṣṭamapadye
maṇḍanamisrānandagiryoh kecin matena bṛhaspatinandi-
keśvarāvatāratvavad avirodhopapatteḥ/ evaṃ ca sureśvarāder
vidhyādyavatāratvavad asya prathamoktaṃ viśṇvavatāratvam
eva mukhyam iti dik/ ARL on ŚDV 3.6.
- 24 *Ḍiṇḍima* に従って補った。 apare 'pi svīyāiḥ paraiś ca saha
yersyā matsaras tatparān daityān/ *Ḍiṇḍima* on ŚDV 3.7.
- 25 ARL は、「二元論者と敵対する～」と解する。 svasyātmanah
parotkataitādrśīrśyā parasya viśaye prakāśya iṣṭaśabdādi-
lābhauttarakālikāntahkaraṇavṛttiviśeṣātmakasukhe viśaye
sprhābhiśas tatra parāś tadekaparāyaṇā ye nikhilabhedavādināś
te vidviṣaḥ śatravo yasya sa/ ARL on ŚDV 3.7.
- 26 天界に住む者 (divaukas)
- 27 注 6 を参照。
- 28 創造者 (dhātṛ)
- 29 言葉の主 (gīspati)
- 30 自在神 (īśvara)
- 31 注 28 を参照。
- 32 ドゥルヴァサナ (durvasana)
- 33 言葉 (vāṇī)
- 34 Dvivedī 2012 は「聖者たちの言葉によって～」と解
するが、api の意味なども考慮して、*Ḍiṇḍima* などの
ように vāṇī をサラスヴァティーと解釈した。
- 35 幸福をもたらす者 (śankara)
- 36 *Ḍiṇḍima* によれば、4 ヴェーダ (リグ・ヴェーダ、ヤ
ジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・
ヴェーダ)、6 つのヴェーダ補助学 (音声学、祭事学、
文法学、韻律学、暦学、語源学)、ミーマーンサー、
ダルマ・シャーストラ、ニヤーヤ、古譚という 14 の
学問分野を指す。 vidyā ŋgyajuṣāmātharvasamjñāś catvāro
vedāḥ śikṣā kalpo vyākaraṇam chando jyotiṣam niruktir
iti ṣaḍaṅgāni mīmāṃsā dharmaśāstraṃ nyāyaḥ purāṇam
iti caturdaśa/ *Ḍiṇḍima* on ŚDV 3.15.
- 37 ARL は、sirogata を「頭髮 (śiroruha) が生まれつき生え
ているように、知識も生まれつき備わっていた」という
ように、頭髮の比喩として捉えており、Upādhyāya 1967
もそれに従う。 yathā śiroruhādikam śārīrasyāvayavajātam
sahajam eva tathā tasyāḥ sarvavidyādyupalakṣitayāvac-
chabdabrahmarūpam aṅgajātam svabhāvasiddham eveti/
ARL on ŚDV 3.15.
- 38 *Ḍiṇḍima* では、サーンキヤ、ヨーガ、ヴァイシェシカ、
ニヤーヤ、ミーマーンサー、ヴェーダーンタという、
いわゆる六派哲学を指すとす。一方、ARL は、マヌ
などが著した伝承聖典、副次的伝承聖典といった法
典や、バーダラーヤナなどが著した 18 種の大古譚、
副次的古譚といったものを指すとす。 sāmṁhyapāta-
ñjalavaiśeṣikanyāyamīmāṃsāvedāntākhyāni śāstrāṇi/
Ḍiṇḍima on ŚDV 3.16. manvādibhiḥ prāṇītam yāvat
smṛtyupasmṛtyādirūpam dharmaśāstraṃ tathā śrībādarāya-
nādibhiḥ prāṇītam aṣṭādaśamahāpurāṇopapurāṇajātam api
sarvaṃ sā bālā vettīty anvayaḥ/ ARL on ŚDV 3.16.
- 39 6 つのヴェーダ補助学については、注 36 を参照。
- 40 *Ḍiṇḍima* では、美文詩のほかには戯曲も挙げている。
kāvyānāṭakādīn/ *Ḍiṇḍima* on ŚDV 3.16.
- 41 ヴィシュヴァルーパは、マンダナの別名。 viśvarūpam
maṇḍanāparanāmadheyam/ *Ḍiṇḍima* on ŚDV 3.17. ŚDV
では、シャンカラとの論争に敗れたマンダナが、後
にシャンカラの弟子となり、スレーシュヴァラと名
を改めたとされるが、スレーシュヴァラの弟子であ
るサルヴァジュニヤートマンの *Samkṣepaśārīraka* で
はマンダナの説が批判されており、歴史的な事実と
合わない。この点については、Dvivedī 2012, p.78 を
参照。
- 42 身体を備えたもの (śārīrabhāj)
- 43 *Ḍiṇḍima* は「言うべきことを言わないのは、私に恥
じらいをもたらします。〔そこで〕私は、あなたの
根気のよさに免じて、心の中にあることをお話しし
ましょう」というように解する。
- 44 再生族 (dvija)
- 45 *Ḍiṇḍima* の解釈に従って補った。 he tāta yady atra
tatpādapadmarajahprāptau bhavān sāhāyāṃ vidadhyāt
tarhi sprhā saphalā syād ity arthaḥ// *Ḍiṇḍima* on ŚDV 3.
28.
- 46 ARL は、第 2 解釈として「それゆえに」という意味を
提示する。 tasya hetor ity asya tasmāt kāraṇād iti vārthaḥ/
“nimittaparyāyaprayoge sarvāsām prāyadarśanam” iti
vacanāt ṣaṣṭhī// ARL on ŚDV 3.31.
- 47 「与えるべきか、与えるべきでないかという 2 つの
選択肢のうちの一つを、正しく知ったうえで答えよ」
といった意味。 kim deyā na deyā vā tasmāt tvam pakṣadvaya
ekam anumāya samyaginātvā brūhi// ARL on ŚDV
3.33.
- 48 「世に知られている者であっても、吟味しないままで
娘を与えるべきではない」とこのように限定するこ
とはできないという意味。 tathā ca lokaprasiddhāpy
aparīkṣitāya sūtā na deyety etan niyantum na śakyam ity
arthaḥ/ ARL on ŚDV 3.35.
- 49 ヤドゥ家の者 (yadukula)
- 50 ただし、Dvivedī 2013 によれば、古譚に見られる話
とは異なる。
- 51 善逝 (sugata)
- 52 バッタ・パーダ (bhaṭṭapāda)。クマーリラが仏教徒を
打ち負かしたことは、ŚDV 1.60 以下で描かれる。該当
箇所和訳に関しては、堀田 2018, p.34 以下を参照。
- 53 *Ḍiṇḍima* の解釈に従って補った。 Upādhyāya 1967,
Dvivedī 2013 は「ある者たちは〔財産〕を得られな
い」と解する。
- 54 *Gautamadharmasūtra* 18.21-23; *Vasiṣṭhadharmasūtra*
17.69-71; *Manusmṛti* 9.88-90 等を参照。
- 55 ARL は、サラスヴァティーとヴィシュヴァルーパの
2 人と解するが、従わない。 tayoh sarasvatīviśvarūpayoh/
ARL on ŚDV 3.43.

- 56 *Ḍiṇḍima* は2人のうちの一方と解する。 *anyo dvābhyām itaro viṣṇumitrapreṣito brāhmaṇaḥ/ Ḍiṇḍima on ŚDV 3.46*。しかし、ここでは、*Upādhyāya 1967, Dvivedī 2013* のように、サラスヴァティーの家からやって来たもう1人のバラモンと解釈した。
- 57 地上における神 (*vasudhāsura*)
- 58 *Ḍiṇḍima* は、3.50の言葉を指すと解する。
- 59 *vidheya* を *niyojya* と解する *Ḍiṇḍima* の解釈に従った。ARL は “*avidheya*” とし、なすべきことがない、すなわちなすべきことをなし終えたという意味に解しており、*Upādhyāya 1967* もそれに従っている。 *avidheyā ity cchedaḥ/ na vidyate vidheyaṃ yeṣāṃ te tathā kṛtakṛtyā ity arthaḥ/ ARL on ŚDV 3.53*。
- 60 *Upādhyāya 1967, Dvivedī 2013* は「装身具の輝きによって身体の本来的な美しさが覆われてしまう」というように逆に解する。しかし、「2人の輝き<宝石の輝き」という考え方は文脈に合わないと考え、従わなかった。
- 61 ヒマミトラの息子 (*himamitrasūnu*)
- 62 尊敬すべきヴィシュヌミトラの娘 (*śrīviṣṇumitraduhitṛ*)
- 63 ARL は、*āyatate* ではなく、*yatate* と解する。 *yā pūrvoktaguṇā vanitā tasyāṃ tvaṇmātrviṣaye yatate yatnaśīlā bhavati/ ARL on ŚDV 3.66*。
- 64 注32を参照。
- 65 ケーシャヴァ (*keśava*)
- 66 シャールンガ弓を持つ者 (*śārṅgin*)
- 67 注65を参照。
- 68 主 (*īśa*)
- 69 4つの顔を持つ者 (*caturāsya*)

参考文献

堀田和義

2018 「シャンカラの世界征服—*Śaṅkaradigvijaya* 第1章訳注—」『武蔵野大学通信教育部人間学研究論集』第7号, pp.29-40.

2020 「シャンカラの世界征服—*Śaṅkaradigvijaya* 第2章訳注—」『武蔵野大学通信教育部人間学研究論集』第9号, pp.21-32.

前田 専学

1980 『ヴェーダーンタの哲学—シャンカラを中心として—』(サーラ叢書24), 平楽寺書店.

Dvivedī, Śivaprasāda

2012 *Śrīvidyāranyaviracitaḥ Śrīśaṅkaradigvijayaḥ. Vidyābhavana Prācyavidyā Granthamālā No.249. Vārāṇasī: Caukhambā Vidyābhavana.*

Potter, Karl H.

1981 *Encyclopedia of Indian Philosophies: Advaita Vedānta up to Śaṅkara and His Pupils*. Princeton: Princeton University Press.

Subbaratnam, K. V.

1972 *Mādhavīya Śrīmacchankaradigvijayaḥ*. Chennai: Akhilabhārataśaṅkarasevāsamiti.

Upādhyāya, Baladeva

1967 (or 1968) *Śrīśaṅkaradigvijaya. Śrī Śravaṇanātha Jñānamandira Granthamālā No.1. Haradvāra: Mahanta Mahādevanātha.*